

見る・歩く・学ぶ・集う

安房国再発見!

館山まるごと博物館

千葉県館山市は、古くから「安房国(あわのくに)」と呼ばれる房総半島南部の中心地です。地図を南北逆さに見てみると、弧を描いた日本列島の頂点に位置し、太平洋世界に開かれて、豊かなネットワークで結ばれた安房の姿が見えてきます。私たちは、その自然や歴史的環境を「まるごと博物館」と捉えて、まちづくりに活かしています。



環日本海諸国図 この地図は、富山県が作成した地図を転載したものである。(平24情使第238号)



海とともに生きるまち



陽光が強く、沖合に黒潮と親潮が交わる安房では、森や海で豊かな生命が育まれてきました。海に丘陵が迫り、岩礁の多い複雑な地形のため、天然の良港に恵まれていました。人びとは漁労を営み、干したアワビを税として朝廷に貢納していた歴史もあります。

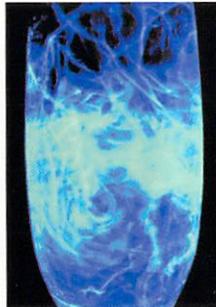


のしアワビ

「鏡が浦」と呼ばれる館山湾は、サンゴやウミホタル、熱帯魚などが生息しています。歩いて渡れる無人島「沖ノ島」は、タカラガイやイルカの耳骨を拾うビーチコーミングが人気の、癒しの場です。



タカラガイ



ウミホタル

地震津波を乗り越えた知恵と祈り

房総半島の沖合には2つのプレートが沈み込み、日本一隆起しているといわれる安房では、海岸段丘や断層が多く見られます。内陸部には、海食洞窟や縄文サング地層、「200万年前の海底地すべり地層」があり、大山千枚田は地すべり地帯を工夫した棚田といえます。

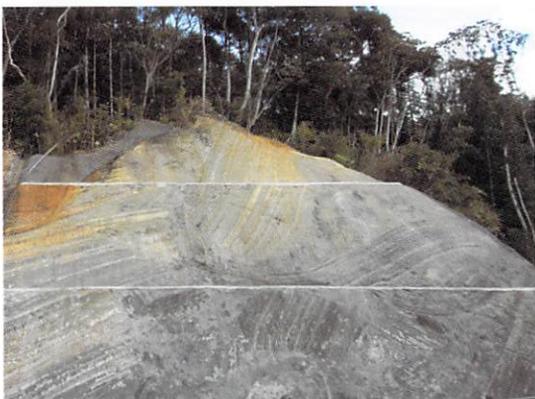
館山は、関東大震災で99%壊滅しました。近代彫刻の祖・長沼守敬(もりよし)は、亡くなった知人を供養するためにレリーフを作っています。路地にあるサイカチの古木は、元禄地震でよじ登った人が津波から助かったといわれ、葉が食用、実が洗剤、トゲが解毒剤にもなるという木です。地震や津波のたびに困難を乗り越えた人びとの絆は、信仰や祭礼の形となって今に伝えられています。



震災供養レリーフ／長沼守敬作



サイカチの木



200万年前の海底地すべり地層



大山千枚田

信仰の聖地

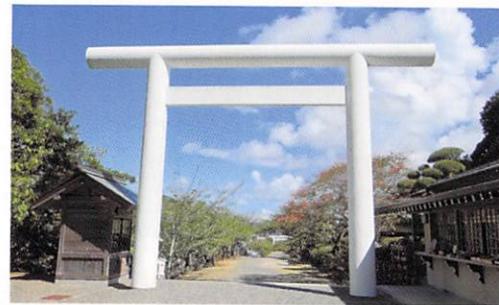


館山湾から見る富士山の夕景

古代の人びとが住んでいた海食洞窟から、祭祀に用いた土器などが見つかっています。海洋民たちが崇拝した安房大神を祀った聖地が、後に安房神社になったという説もあります。大寺山洞窟遺跡からは、5～6世紀の舟形木棺に納めた人骨とともに鉄の甲冑や武器などが出土しています。海洋民のリーダーの墓であると考えられ、北欧のバイキングのような「舟葬墓」として日本で初めて確認された貴重な遺跡です。



洞窟遺跡ジオラマ(館山市立博物館)



安房神社

海の向こうの西方浄土に霊峰富士を仰ぐ信仰の地として、古くから多くの巡礼者が訪れています。千葉県内最古の磨崖仏をもつ崖観音、坂東三十三ヶ所巡礼の結願所である那古寺など、多くの寺社仏閣が建てられました。鶴谷八幡宮の祭礼は「やわたんまち」と呼ばれ、豊饒の恵みに感謝と祈りを捧げる伝統が今も脈々と続いています。



崖観音

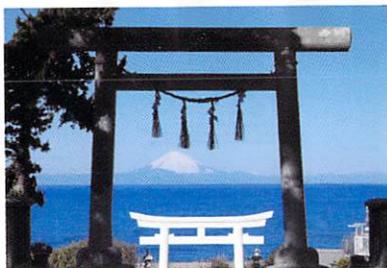


やわたんまち(八幡祭礼)の御船

画家に愛された神話の里

館山最南端の布良(めら)は、天富命(あめのとみのみこと)が四国の阿波忌部(いんべ)一族を率いて上陸したといわれる神話の里です。女神山・男神山がそびえ、水平線には富士山や、伊豆大島・利島・新島・式根島が連なって見えます。

古くからマグロ漁で栄えた漁村で、水難事故も多く、冬の夜空に輝く赤いカノーブスは「布良星」と呼ばれ、亡くなった漁師の魂だという伝説もあります。



布良崎神社から見た富士山



青木繁《海の幸》 石橋財団石橋美術館蔵 (重要文化財)

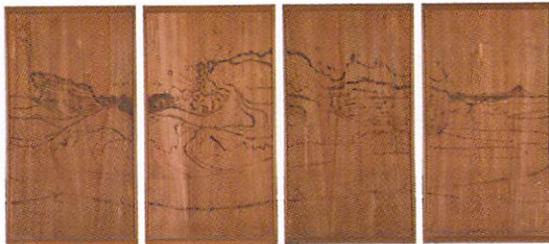


1904年夏、画家の青木繁(あおきしげる)は、友人の坂本繁二郎・森田恒友、恋人の福田たねとともに布良を訪れ、《海の幸》を描きました。4人が滞在した家の当主は、漁船主の小谷喜録(こたにきろく)で、水難救助会役員や村会議員も務めていました。布良崎神社の祭礼では、男たちが1トンの大神輿を担ぎ、夕日の海に入ってゆく「御浜下り」があります。勇壮なこの神事からインスピレーションを得て、《海の幸》の群像が生まれたのではないかと考えられています。



波の伊八《龍》 円光寺蔵

翌年、青木は再び館山を訪れました。滞在した円光寺では、本堂の板戸に焼き釘を使って、荒々しい海の風景画を描いています。中央には岩にぶつかる荒波、右手には富士山、左手には伊豆の島々。その情景はまるで、円光寺にある龍の欄間彫刻に似ています。その作者は、波の伊八と呼ばれる安房の彫物師で、葛飾北斎など多くの芸術家に影響を与えたともいわれています。



青木繁《海景(円光寺板戸)》 個人蔵

多くの画家に愛された布良では、素晴らしい絵画が誕生しています。館山に暮らした壁画家の寺崎武男は多くの神話を描き、安房神社や布良崎神社に奉納しました。新宿中村屋サロンで活躍した中村彝(つね)や、晩年の青木繁に絵を習ったという多々羅義雄(たたらよしお)も、布良で作品を描いています。



寺崎武男《祖神を偲ぶ天富命の図》
安房神社縁起壁画



中村彝《海辺の村(白壁の家)》 複製:館山中村屋蔵



多々羅義雄《房州布良を写す》 千葉市立美術館蔵

《海の幸》誕生の布良は「美術界の聖地」といわれています。1962年に青木繁を敬慕する画家たちの寄付で建てられた記念碑は、一時壊されそうになりましたが、地元住民の熱意で守られました。

青木が滞在した「小谷家住宅」は築130年で、今も家族が暮らしています。現在、保存を熱望する全国の美術家によって、修理復元のための募金活動が進められています。



千葉県館山市の文化財「小谷家住宅」の保存にご支援をお願いします。
青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会

<http://aoki-shigeru.awa.jp> 年会費2,000円 郵便口座00150-6-616201

館山市では、「小谷家住宅の保存・活用」への寄付を指定すると、所得税などの税金が軽減される「ふるさと納税」制度があります。どうぞご利用ください。

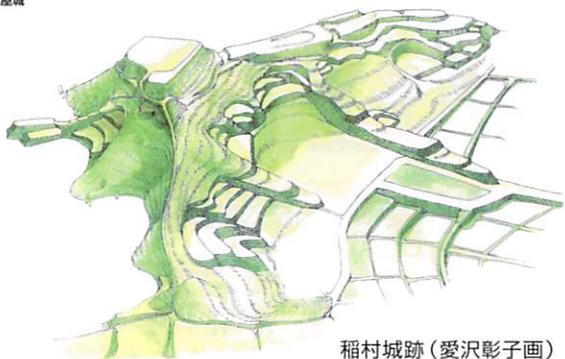
お問合せは 館山市長公室企画課0470-22-3163 <http://www.city.tateyama.chiba.jp/>

八犬伝のふるさと・里見のまち

15世紀半ばから170年の間、海の戦国大名・里見氏が、安房国を治めました。多くの山城が築かれ、館山は交易の湊をもつ城下町として発展しました。



現在、館山城跡は市立博物館のある城山公園として市民に愛される憩いの場です。稲村城跡は、後世にのこそうと願う市民の保存活動が実り、2012年岡本城跡とともに国史跡に指定されました。



八犬伝博物館と戦国コスプレヤー

- 仁 … 思いやり、情け深い心
- 義 … 正しいおこない
- 礼 … 礼儀、礼節
- 智 … 智恵、知性
- 忠 … まごころ、忠義
- 信 … 信じる心、信頼
- 孝 … 親に奉仕すること
- 悌 … 年上を敬うこと



紙芝居「南総里見八犬伝」(愛沢彰子画)

江戸時代、曲亭馬琴(きょくていばきん)は里見氏をモデルにして、長編小説『南総里見八犬伝』を書きました。里見家の伏姫と愛犬・八房に縁のあるサムライ8人は、「仁」「義」「礼」「智」「忠」「信」「孝」「悌」の霊玉をもつ義兄弟となり、安房国を守るという物語です。「八犬伝」は時代を超えて、歌舞伎や映画、人形劇などに演じられ、現代では「ドラゴンボール」などアニメやゲームのモチーフにもなっています。

“平和・交流・共生”の歴史文化をたずねる安房の旅



アクセス



NPO法人 安房文化遺産フォーラム

〒294-0036 千葉県館山市館山95 小高記念館
 TEL&FAX : 0470-22-8271
 ホームページ : <http://bunka-isan.awa.jp/>
 Eメール : awabunka@awa.or.jp



文化庁「地域の文化遺産を活かした観光振興と地域活性化」事業

大巖院のハングル「四面石塔」

雄誉霊巖（おうよれいがん）上人が開いた館山の大巖院（だいがんいん）には、日本の漢字・中国篆字・インド梵字・朝鮮ハングルで「南無阿弥陀仏」と刻まれた「四面石塔」があります。とくにハングルは古い字体であり、国際的な文化財です。建てられた1624年は、豊臣秀吉の朝鮮侵略から33回忌にあたり、連行された朝鮮人を帰還させる外交事業も行なわれていることから、平和祈願をこめた供養塔ではないかと考えられます。伝記によると、大巖院に立ち寄った朝鮮通信使は霊巖上人の業績を聞いて、「現身の仏陀なりと嘆徳」したと記されています。日韓交流史をひもとく上で重要な寺院として注目されています。

一方、江戸幕府に取り立てられていた霊巖上人は、江戸（東京）の湿地帯を埋め立てて、霊巖寺を開きました。ここは霊巖島と呼ばれて、房州航路の湊となり、館山からは新鮮な魚が送られ、江戸からは多くの文人墨客が訪れました。

北面	西面	南面	東面
卍 卍 卍	卍 卍 卍	卍 卍 卍	卍 卍 卍
千禧元知二年二月二十日房州山霊巖寺大巖院塔建立	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛



霊巖上人直筆の額

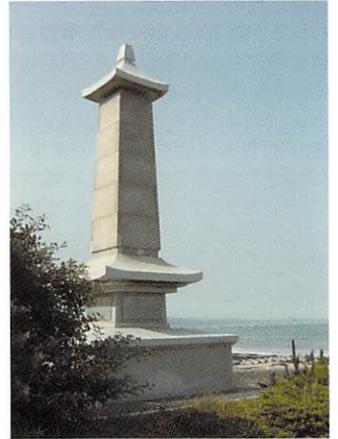
濟州島から来た海女たちの墓

太平洋に面した和田浦という漁村には、戦前から出稼ぎにやってきた韓国濟州島の海女たちが住んでいました。慣れない異国で苦労しながらも、地元の海女たちと一緒に海に潜り、冬は花を作りながら生きてきました。現在、海を見下ろせる鴨川の長興院は、「濟州道水産開拓先覚者・朴基滿（パクキマン）之墓」をはじめ、多くの韓国人海女が眠る墓地となっています。



清国船「元順号」遭難救助の碑

1780年、清国貿易船「元順号」は交易地の長崎に向かう途中で遭難し、安房に漂着しました。嵐の中、漁師たちは懸命に救助し、手厚く介護しました。200年を経て、千倉海岸に「日中友好」と刻まれた記念碑が建てられ、今も大切にされています。



韓国にある日本の実習船「快鷹丸」遭難記念碑

20世紀になると、水産講習所の館山実習場が北下台（ぼっけだい）に開かれ、本格的な水産教育が進められました。館山湾で訓練していた「快鷹丸」（かいようまる）は、1907年に出漁した朝鮮海域で嵐に遭い、漁師に救助されましたが、4名の学生と教員が亡くなりました。韓国浦項（ポハン）に建てられた遭難記念碑は、終戦時に倒され埋められたものの、「海に生きる男の友情の証」として1971年に掘り起こされ、韓国の漁師と東京海洋大学の同窓会「楽水会」によって今も保存されています。



近代水産業のあゆみ

館山湾に面した北下台(ぼっけだい)は、海上交通の守り神として信仰される琴平神社を中心とした歴史公園です。航路標識であった正木燈台の跡や遭難供養碑、近代水産業を発展させた関澤明清(せきざわあけきよ)の顕彰碑などがあります。欧米の万博に学んだ関澤は、サケ・マス的人工孵化や缶詰製造、捕鯨銃などの技術を導入し、水産伝習所の初代所長として人材育成に尽力しました。館山に日本水産会社を設立し、房総捕鯨の祖・醍醐新兵衛(だいごしんべえ)と組んで遠洋捕鯨にも成功しています。



正木燈台跡

転地療養と医療伝道

明治期には、温暖な海辺の館山は転地療養の地となり、多くの人々が東京の霊巖島から船でやってきました。北下台には海水を利用した湯治場も開かれ、1891年には住民の出資によって館山病院がつけられました。初代院長・川名博夫は、近代医学に貢献したドイツ人医師のベルツ博士から指導を受け、全国に先駆けてサナトリウム(結核療養病棟)を開きました。川名夫人の父・福原有信(ふくはらありのぶ)は、館山生まれで銀座資生堂薬局の創業者であり、館山病院は政財界に広く知られました。東京の虚弱児童の療養施設を館山に開いた渋沢栄一は、著名な実業家であり、渡米時には館山病院二代目院長の穂坂与明(ほさかよしはる)を侍医として同行しています。一方、秦呑舟(はたどんしゅう)やコルバン夫妻といったキリスト教医師による医療伝道も、転地療養のネットワークを支えました。画家の中原淳一が療養した館山の浜辺には、美しい詩碑が建っています。

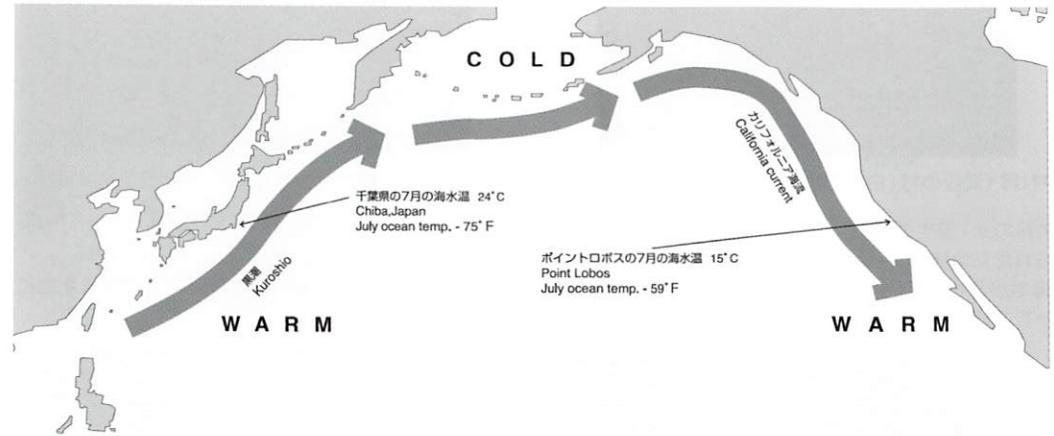


明治期の北下台

太平洋を渡ったアワビ漁師たち

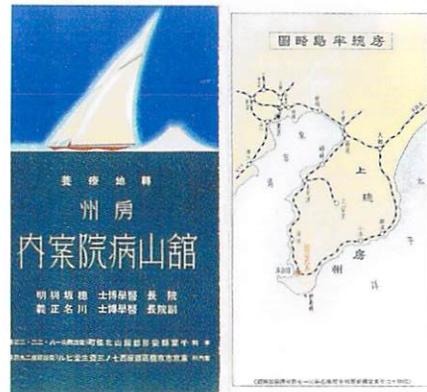
明治中期より、小谷源之助(こだにげんのすけ)・仲治郎(なかじろう)兄弟をリーダーとする房総アワビ漁師たちは渡米し、モンレーで器械式潜水のアワビ漁に成功しました。弟仲治郎は帰国し、潜水夫の養成と水産教育に尽くしています。「万祝(まいわい)」という漁師の着物には、日米の国旗とUSAの文字が染められています。日本人初のハリウッド俳優・早川雪洲(せつしゅう)は安房出身で、兄がアワビ潜水夫でした。ゲストハウスには、政治家の尾崎行雄や画家の竹久夢二などが滞在しています。

しかし戦争が始まると、日系人は砂漠の強制収容所に送られて、家族は離れ離れとなり、アワビ移民の歴史は幕を閉じました。



中原淳一の詩碑

©JUNICHI NAKAHARA/ひまわりや



昭和初期の転地療養パンフレット

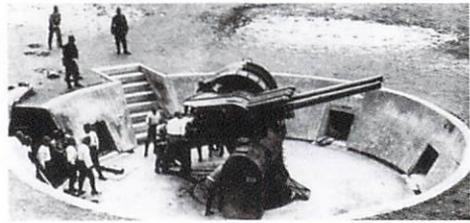


戦争遺跡は平和の語り部

東京湾入口の館山は、幕末から台場が設置され、明治以降は東京湾要塞に位置づけられました。関東大震災で隆起した海を埋め立てて、1930年に「館山海軍航空隊」が開かれました。空母パイロットや落下傘部隊の実戦訓練の基地となり、中国重慶やハワイ真珠湾をはじめ、南方の島々への奇襲攻撃を成功させています。

戦争末期になると、安房は本土決戦体制となり、人間魚雷「回天」や特攻のモーターボート「震洋」、人間ロケット「桜花」などの特攻基地が次々と作られていきました。7万の兵士が送り込まれ、農家には花作り禁止令が出されて、花畑は芋畑に変えられました。苗や種は焼き捨てられましたが、花を愛する農民はひそかに抵抗し、こっそりと種や球根を隠しました。

子どもたちもまた、夜間戦に備えた軍用物資としてウミホタル採取を命じられていました。戦争が終わると、再び花作りが始められました。これらの実話は小説や音楽物語などに描かれ、今に語り継がれています。



東京湾要塞
(砲台の編成と射界)



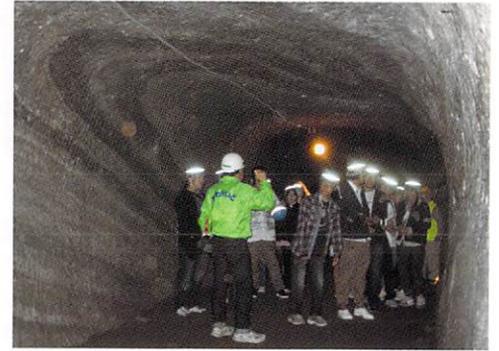
弾薬庫

戦争遺跡をまちづくりに活かす

1995年、広島原爆ドームがユネスコの世界遺産に登録されると、日本の文化庁でも、戦争遺跡を文化財として認めるようになりました。

市民の要望によって一般公開された「館山海軍航空隊赤山地下壕跡」には、内部に発電所や兵器格納庫のほか、奉安殿(ほうあんでん)や病院などの施設がありました。平和学習だけでなく、壁面には立体的な地層が見られる総合学習の場といえます。

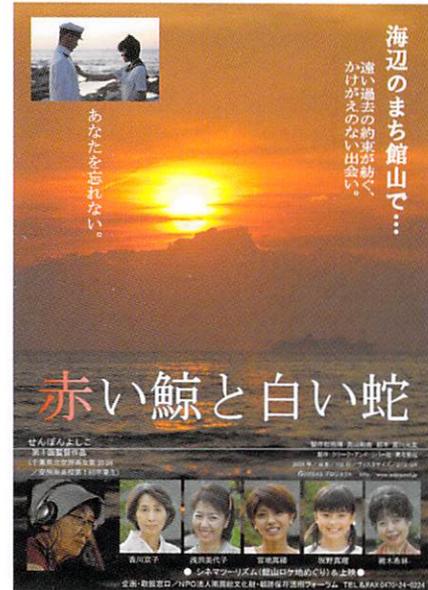
市内には、戦闘機を格納する掩体壕(えんたいごう)をはじめ、「戦闘指揮所」「作戦室」という額や龍のレリーフが残る地下壕など、全国的にも重要と認められた戦争遺跡が、未整備のまま多数点在しています。館山市では、戦争遺跡を組み入れた都市づくりの目標像として「地域まるごとオープンエアミュージアム・館山歴史公園都市」構想を掲げています。



赤山地下壕跡(館山市指定文化財)

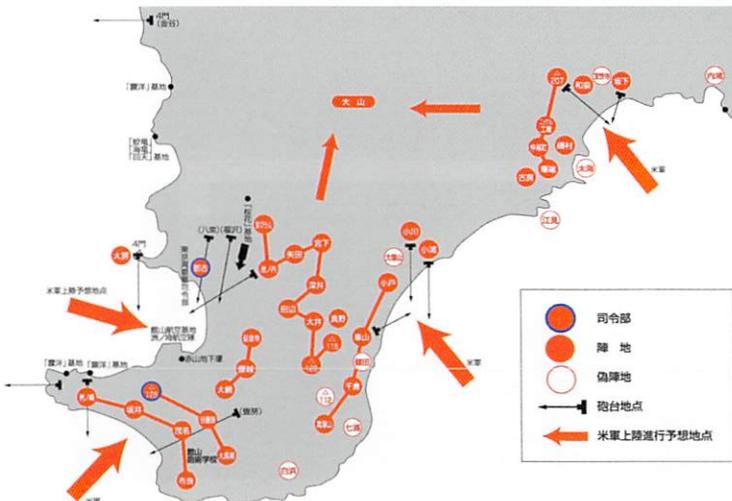


掩体壕



龍のレリーフと「戦闘指揮所」の額がある地下壕
(1944年)

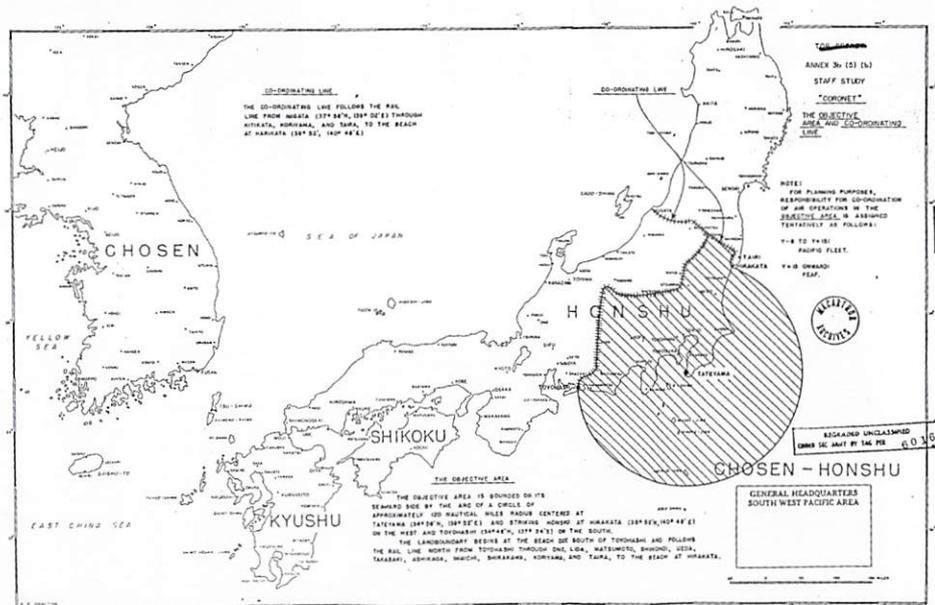
戦後60年には、館山の戦争遺跡を舞台に、平和祈念映画「赤い鯨と白い蛇」が制作されました。



安房の「本土決戦」配備計画(1945年)



コロネット作戦とアメリカ占領軍上陸



コロネット作戦計画図

アメリカ軍は、関東一円をターゲットとした日本本土侵攻計画「コロネット作戦」を立てました。その中心地は、館山を指しています。これは、日系人強制収容所にいたモンレーの房総アワビ移民から情報収集したと考えられます。

敗戦となり、ミズーリ号の降伏文書調印式の翌日、アメリカ占領軍3,500名が館山に上陸し、本土で唯一「4日間」の直接軍攻が敷かれました。近年、市民の調査によって忘れられていた歴史が明らかになり、日米の市民交流が行なわれています。



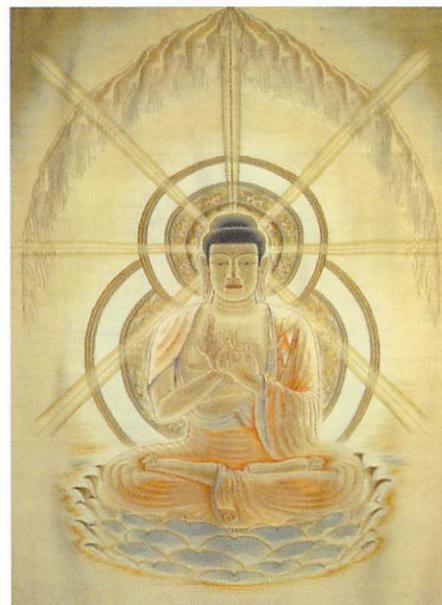
上陸地の今



1945.9.3 AM9:20 館山にアメリカ占領軍上陸

「平和の文化」を未来に

「戦争は人の心の中で生まれるものだから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない」とユネスコ憲章前文に謳われています。この理念に共鳴し、館山では1948年に民間ユネスコ運動が始まり、今なお世界で唯一ユネスコの名がついた保育園が運営されています。



国連に寄贈した錦綴織／遠藤虚籟・和田秋野

錦綴織(にしきつづれおり)作家の遠藤虚籟(きょらい)と和田秋野は、戦前戦後に館山に暮らしました。1951年、戦没者供養と世界平和を祈って「曼荼羅中尊阿弥陀如来像」を織り上げ、全日本仏教徒の総意として、国連NY本部に寄贈しました。

長崎平和祈念像で知られる彫刻家の北村西望(せいぼう)は、1928年安房水産学校長の銅像を作りましたが、金属の不足した戦時下に供出を命じられました。そのとき教員たちは石膏で型を残し、戦後に同窓会が再建しています。(下左)

戦後、キリスト教牧師・深津文雄は、戦争で苦しんだ女性たちの保護施設「かたに婦人の村」を、世界中の支援を受けて館山に開きました。ここで暮らす一人の女性の告白を受けて、戦後40年のときに「憶従軍慰安婦」と刻まれた慰霊碑が建てられました。同じように、鴨川市にも「名も無き女の碑」と刻まれた碑があります。(下中)

歴史に育まれた「館山まるごと博物館」には、安房の先人が培ってきた「平和・交流・共生」の精神が輝いています。それはまさに、現代に生きる私たちの祈りともいえます。



「平和の文化」とは、争いを対話によって解決していくという考え方や行動様式です。ユネスコの提唱を受けて、国連は2000年を「平和の文化国際年」と宣言し、2001～10年を「世界の子どもたちのための平和と非暴力の文化国際10年」と決めました。私たちも地域の文化遺産を活かしてこの理念を継承し、人びとが支え合う持続可能な地域社会を未来にのこしたいと願っています。